



# Humanity & Nature Newsletter

No.27  
August 2010

地球研ニュース



ザンビア南部州の野菜マーケット。朝から近隣の女性たちが道路沿いに陣取って、野菜や果物を売っている。車が停車するたびに野菜を持った女性たちが取り囲む。野菜売りの女の子が持っているのはマスクとよばれる野生の果物(撮影:梅津千恵子)

## 今号の 内容

P2

特集1●国際動向調査  
世界をめぐる「地球環境学」の  
方向と課題を見極める  
渡邊紹裕×阿部健一×  
アイスン・ウヤル×林 憲吾

P5

特集2●終了プロジェクトの報告  
ボーダレスに環境問題の解決をさぐる  
白岩孝行×岩下明裕×  
大西健夫×花松泰倫×阿部健一

P8

特集3●地球研コロキウム(第10回)  
豊かさ・幸福・生の質——人間開発  
梅津千恵子

P10

特集4●地球研コロキウム(第11回)  
ガバナンス・コモンズ・社会的共通資本  
秋道智彌

P12

■ 前略 地球研殿——関係者からの応援メッセージ  
プロジェクト研究のまとめ方、終わり方を思う  
今村彰生

P13

■ 所員紹介——私の考える地球環境問題と未来  
一座建立の世界へようこそ  
木村栄美

P14

■ お知らせ  
イベントの報告、研究活動の動向、  
研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)、  
イベント情報

# 世界をめぐる「地球環境学」の方向と課題を見極める

話し手 ● **渡邊紹裕** (地球研研究推進戦略センター 戦略策定部門長) × **阿部健一** (地球研研究推進戦略センター 成果公開・広報部門長) × **アイスン・ウヤル** (地球研研究推進戦略センター助教) × **林 憲吾** (地球研プロジェクト研究員)

地球研は2011年4月に設立から10年というひとつの節目を迎える。第二期のスタートに向けて地球環境学の方向と課題を見極めることを目的として、地球環境研究の国際的な動向を把握分析する調査を2009年秋から準備し、2010年3月に現地調査を行なった。

地球環境問題に総合的に取り組む海外の研究機関や研究プログラムの動向を分析することで、地球研第二期の事業の軸として構想している未来設計イニシアティブを始動するうえでの基盤づくりに貢献すること

が目的である。研究推進戦略センター(CCPC) 戦略策定部門の調査事業との連携で進めたこの調査は、第二期の事業だけではなく、組織理念や構造、特徴など、研究機関としてのあり方に関してフィードバックすることもねらいとした。

動向調査は、五つのミッションから構成され、調査対象は世界各地に及んだ(表)。

さらにこの調査活動は、基幹研究ハブと未来設計イニシアティブ構築のための設計科学勉強会として位置づけられた「未来環境デザインセミナー(2010年3月に5回開

催)」と、風水土イニシアティブの研究会「新しい『水のやりくり』——その基盤的要素の考察(2009年11月-2010年3月に10回開催)」との連携も考慮した。

調査の成果は、2010年度に行なった「イニシアティブ動向調査報告会(4月19日)」ならびに、上記二つの研究会シリーズの報告の場でもあった「未来設計イニシアティブ構築のための整備事業報告会(4月27日)」で、担当の渡邊紹裕・戦略策定部門長が報告した。

## 座談会

アイスン●まず、地球環境研究の国際動向調査を実施するに至った経緯を教えてください。

### 地球研第二期に向けた基盤づくり

阿部●これまで地球研は、総合的な「地球環境学」の構築をめざして研究を進めてきて、ようやく2011年4月に創設10年を迎えます。研究体制も、第一期を終え、第二期に向けて動きだしている。この10年で培ってきた組織の特徴や、未来設計イニシアティブという第二期からの新たな研究の軸が、世界的な地球環境研究のなかでどういった位置づけにあるのかを確認する必要がある。それは、世界の地球環境研究機関の実態を把握すると同時に、海外研究機関の地球研の活動に対する意見を聞くことでもあります。動向調査は以前からそれぞれのプロジェクトベースで行なわれていましたが、研究所レベルの総合的な動向調査は今回が初めてです。

渡邊●たんに相互の認識を深めるだけでなく、地球環境研究に関わる国内・国際研究機関と実際に連携および協力することも重要です。CCPC戦略策定部門の事業のひとつに海外研究機関との連携がある。今回はJST(科学技術振興機構)、地球研および現地の研究機関 IASS (Institute

for Advanced Sustainability Studies) との協働で、ドイツのポツダムでワークショップを開催しました。このワークショップではドイツで2009年に設立された IASS と、地球研ならびに日本の各研究機関の協力が討議された。この点でも、3月は動向調査をするうえで有効な時期でした。

林●地球環境問題の研究にはさまざまなテーマが用いられます。地球研もさまざまなテーマのプロジェクトがあつて研究の幅が広く、個々の研究者の専門性も多様です。しかし一方で、統合的にマネージメントすることや相互のつながりを生むことが難しくなる可能性もある。個人的には、海外の研究機関がどのように研究所内の連携をつくりだしているかを知りたかった。

### 五つのミッション 五つの地域

アイスン●動向調査の各ミッションの内容や訪問先の選定について教えてください。

渡邊●五つのミッションは、それぞれ性格が異なります。まず、プロジェクトに関連する研究動向を調査したもの。これは、北ヨーロッパの調査を中心とした北欧ミッション。ラオス&メコンミッションは、プロジェクトの研究地域での調査が目的です。食農ミッションは、第二期の

イニシアティブを見越して、研究機関だけではなく、NGOやポリシーセンターなどの機関を調査しました。成果発信ミッションは、出版物など成果発信の方法について、そして連携ミッションは、海外の研究機関との連携および協力体制を調査しました。

阿部●各ミッションのメンバーをできるだけ異なるプロジェクトから選びました。研究内容や研究機関の構造および国際協力などについて多角的に議論ができました。われわれの食農ミッションでもプロジェクト研究員の石山俊さんと中村亮さんに合流していただき、彼らのプロジェクトと関わりの深い研究所で調査しました。アイスン●動向調査では、ミッションごとにさまざまな機関を訪問しますが、全調査の「インタビュー・アジェンダ」を、食農ミッ



「未来設計イニシアティブ構築のための整備事業報告会」(地球研)

ションの中村さんと一緒に事前に作成しました。このアジェンダを調査の自己紹介として利用していただく目的もありました。現地ではアジェンダにもとづいて、調査対象機関の組織理念、設立目的と特徴、研究体制のほか、地球環境問題に対するアプローチ方法や組織としての運営、地球環境研究における国内および国際的立場、研究成果の発信および公開の方法、他の政府や社会および研究機関との連携についても質問しました。もちろん各機関の地球研に対する印象や疑問・質問、未来設計イニシアティブに関する意見交流も項目にあげました。

林●私は、北欧ミッションに参加しまし



連携ミッション(ドイツ)

た。各プロジェクトの関係で、調査地やメンバーは決まっていたが、私の所属するメガ都市プロジェクトでも北欧に関心をもっているの、声をかけていただきました。里プロジェクトの鞍田崇さんもメンバーに加わり、三つの異なるプ

ロジェクトがそれぞれの関心を主張しながら、訪問先の選択などを議論しました。

## 海外研究機関との対話からみえた今後の課題

アイスン●現地で調査した印象はどうでしたか。

阿部●「Rights and responsibilities」という言葉が印象的でした。研究所と研究者との関係がしっかりしていた。研究者の採用時の基準明確化の必要性を感じました。研究所のアイデンティティを確立するには、研究者が研究所からなにを期待されているか、相互に確認をしておかなければなりません。

アイスン●成果発信ミッションでは、ダニエル・ナイルズさんがイギリスとドイツの研究機関を訪問しました。地球研と共同での英文ジャーナルの発刊など、出版に関する事項をおもに検討してもらいました。ジャーナルの出版は、現地の研究機関が、それに対応できる準備を整えていないため、今すぐには難しいという判断でした。一方、成果発信に対する印象は、「science for society」という考え方がよく表れていました。

林●出版に関して北欧の事例に興味深かったのは、自分のところでの出版を廃止して、すべて外部の査読雑誌に投稿するといった動きが見られたことです。政策ダイアログやブログによる市民との対話なども促進していました。

アイスン●海外の機関は、地球研や未来設計イニシアティブおよび基幹研究ハブを

### ミッションのメンバーと調査した研究機関

(調査期間)

<b>北欧ミッション</b> 梅津千恵子 / 鞍田 崇 / 林 憲吾 / LEKPRICHAKUL Thamana	(2010年3月13日~20日)
<b>スウェーデン</b> The Nordic Africa Institute (NAI) The Stockholm International Water Institute (SIWI) The Beijer Institute of Ecological Economics	
<b>食農ミッション</b> 阿部健一 / 石山 俊 / 中村 亮	(2010年3月15日~23日)
<b>イタリア</b> Slow Food International University of Gastronomic Science Biodiversity International (BI, CGIAR Center)	
<b>シリア</b> International Center for Agricultural Research in Dry Area (ICARDA, CGIAR Center)	
<b>ラオス&amp;メコンミッション</b> 関野 樹 / 米澤 剛 / 東城文柄 / 西本 太	(2010年3月1日~4日)
<b>バングラデシュ</b> International Centre for Diarrhoeal Disease Research, Bangladesh (ICDDR) Filaria Hospital	
<b>ラオス</b> National Agriculture and Forestry Research Institute (NAFRI) Living Aquatic Resources Research Center (LARReC) Mekong River Commission (MRC) Water Resources and Environment Administration (WREA) National University of Laos, Faculty of Education (FOE-NUOL) National University of Laos, Faculty of Environmental Sciences	
<b>成果発信ミッション</b> NILES Daniel	(2010年3月18日~22日)
<b>イギリス</b> Central Saint Martins College of Art & Design University of the Arts London(CSM) Imperial College London	
<b>ドイツ</b> International Human Dimensions Programme (IHDP)	
<b>連携ミッション</b> 渡邊紹裕 / UYAR Aysun	(2010年3月12日~19日)
<b>ドイツ</b> Institute for Advanced Climate, Earth System and Sustainability Studies (IASS) German Research Centre for Geosciences(GFZ) Potsdam Institute for Climate Impact Research (PIK)	

世界をめぐって「地球環境学」の方向と課題を見極める

どのようにみえていますか。

渡邊●国際的な動向としても、地球環境問題に対して、未来の社会のあり方までを提言する総合的な研究が求められています。地球研のような問題設定や文理融合の総合研究フレームは、海外の研究機関もめざしているけれどなかなか実現できないようで、未来設計イニシアティブの基本的な目的・枠組みは、国際的にも評価されました。海外の研究機関はこれから、地球研の総合的な研究の方向を参考にするでしょう。

阿部●たしかに海外の研究機関では「地球環境問題とはなにか」という根源的な問いはないように見受けられましたね。

林●研究の成果をどうにかすのかという質問が多かったです。北欧のケースでは、政策につなげることへの関心が高く、ある種とてもプラグマティックなところがあった。

阿部●ラオス&メコンミッションでは、新しい研究機関だけではなく、ほぼ10年間、各プロジェクトが研究連携してきたところをあらためて訪問しました。終了したプロジェクトの成果がどのように現地にフィードバックされているか、あるいはプロジェクトをとおして形成した相互の関係をいかに継続的に活用するかを検討することも今後の重要な課題でしょう。



北欧ミッション(スウェーデン)

地球環境研究の未来に  
動向調査をいかにいかすか

アイス●そのためには、今回の動向調査の調査結果・収集資料の公表・保管などの方法、あるいは継続的な調査も考える必要がありますね。

渡邊●未来設計イニシアティブの概念・枠組みの議論をさらに深めて、成果の統合や発信の方向を絞り込むことが求められます。政策提言だけでない多様な「提言」のあり方、課題調査と地域調査との組み合わせや行政と社会に対する立ち位置などを検討しなければならない。

阿部●CGIAR (Consultative Group on International Agricultural Research) では、地域資源管理、生態系、食と農業など、未来設計イニシアティブに関係する研究の枠組みや体制の再構成が世界的に進められよ

うとしている。地球研はその動きもすっかりフォローする必要があります。研究機関だけでなく、環境に関わる国内外の特徴ある主要な組織や運動との連携を進めながら、課題と方法を充実させることも求められます。

林●今回の調査は、海外の研究機関から多くを学んだことも意義がありましたが、今回はじめて、ほかのプロジェクトの人たちと調査にでかけたことで、その道中で異なる観点から意見交換ができたことも有益でした。「レジリアンス」、「農」、「都市」と、地球研側のメンバーの関心領域が多様だったことで、訪問先でも、アフリカの農村を研究する人に会ったり、都市を研究する人を紹介してもらったりして、包括的に相手の特徴を把握することに役立ちました。

阿部●多分野研究者の参加は有効でしたね。海外の動向を調査しながら、地球研内部での議論を促進する手段にもなった。アイス●最近よく話題になっていますが、研究者の日常的なコミュニケーションの活性化は重要です。海外の研究機関では気軽にそれをしている印象がありました。「コーヒーサロン」など、ちょっとした意見交換の場を充実させたいです。

渡邊●そうですね。今回、五つのミッションの調査で得た経験も加えて、第二期を迎えた地球研の総合的な動向調査を今後も系統的に行なう予定です。



食農ミッション(イタリア)

# ボードレスに環境問題の解決をさぐる

研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」〈循環領域プログラム〉

話し手 ● 白岩孝行(北海道大学低温科学研究所准教授) × 岩下明裕(北海道大学スラブ研究センター教授) ×  
大西健夫(岐阜大学流域圏科学研究センター助教) × 花松泰倫(地球研外来研究員) × 阿部健一(地球研教授)

循環領域プログラムが世に成果を問う四つめの終了プロジェクトの研究対象地は、中国とロシアを流れる全長4,000kmを超えるアムール川の流域とオホーツク海。陸と海での5年におよぶフィールドワークを経て、2010年3月に終了した。岩下明裕教授を迎えて、プロジェクトリーダーの白岩孝行准教授に、キー・コンセプト誕生のいきさつや、地域社会への働きかけなど、プロジェクトの経緯と終了後の展望をうかがった。

阿部●ぼくはプロジェクトの最初から白岩さんがリーダーを務めていたと思っていましたが、じつは違う。プロジェクトの成果は当初の予定とかなり違ったんじゃないですか？

白岩●全体像は大きくは変わっていませんが、自然科学的なストーリーは最初からあったものの、人文社会科学との融合をめざす地球研でそれをどうやってまとめ、どんなゴールに向かうかは、はっきりしていませんでした。

## 日本の歴史から見つけた キー・コンセプト

阿部●最初から「巨大魚付林」というコンセプトだったんですか？

白岩●当初の目的は、アムール川とオホーツク海の大きな水と物質の循環を立証することでした。その過程で、オホーツク海と親潮の豊かさの源が陸起源の物質にあるという想定はできていました。「陸と海とのつながり」という発想は最初から頭にあったのですが、本当につながっていることを証明するのが最初のタスクでした。つながっているとわかった段階で「魚付林」と言い始めました。2年目くらいからでしょうか。

岩下●プロジェクトが始まる前に、白岩さんたちが私を訪ねてきた。メンバーの誰も中国・ロシア国境地域の土地勘がなかったので、地図や写真を見せたり、どこを

掘って調べるかなど、いろんなアドバイスをしました。「魚付林」という言葉は、そのときにはまったく聞かなかった。それ以後何年間か、まったく関わっていませんでした。魚付林というコンセプトを最近知ってびっくりしました。(笑) 英語の Giant Fish-breeding Forestは造語ですか？

白岩●造語といえば造語ですね。外国にはそもそもこういう考え方がないので、直訳がないのです。日本では千年くらい前からあって、江戸時代には、沿岸のサケやニシンなどを守るために内陸の森林を保護するという藩の政策があったそうです。日本オリジナルの発想です。

大西●プロジェクトではちゃんとレビューできていないのですが、私が調べた限りでは、日本以外にはそういう言葉はないですね。

岩下●ない理由が大事です。日本では森があって川が流れて海に注ぐという経路はパッケージとして認識されている。日本は山から海までの距離が短いコンパクトなスケールだったから、そのつながりが見えやすいし、人びとは森と海のどちらにも絡む生活を営んでいた。中国などは平野部がかなり雄大ですから、森と海の間をつながりを認識することは、まず不可能でしょう。

白岩●漁師の立場から見ても、海で魚を捕りながら、振り返ると背後には山があるという地理的特徴は、そういう意識を

発達させたひとつの理由だと思います。岩下●では、経済や情報のグローバル化、国境意識の低下、技術発展が進んで、日本固有のミクロな世界観から生まれた魚付林の発想が、マクロレベルにも適用できるようになったということですか。

白岩●そういう側面もありますが、「巨大魚付林」は自然科学的にも新しい発見です。日本に昔からあったのは、沿岸と内陸との小さなスケールでの結びつきです。それとは違って、陸からのインパクトは遠く離れた外洋の生態系にまで届くと主張したのは、自然科学の分野では、私たちのプロジェクトが初めてだという自負があります。

## 地域のデータから全体を考える

阿部●溶存鉄が鍵になる物質だと確信できたのは、どのあたりで？

大西●1年目は、陸から海に鉄が供給されていることは間違いない、蓋然性は高いという段階だったんですが、供給元はわかっていなかった。森林と湿地のどちらが重要なのか、まずそこから確かめようということになった。陸地に関する研究は、このプロジェクトを立ち上げたあとに新たに始めたので、それまでの積み上げがなくて大変でした。長い道のりでしたが、結論から言うと、湿地のほうが重要だとわかった。

アムール川流域のいくつかのポイント



アムール川中流域の穏やかな流れ。ハバロフスク周辺までは中国とロシアとの国境河川として流れ、その後ロシア領に入ってオホーツク海に抜ける(撮影:白岩孝行)

## ボーダレスに環境問題の解決をさぐる

2009年11月に行なわれた国際シンポジウムでの記念撮影。日中口から多くの研究者が集まり、コンソーシアムの設立が高らかに宣言された



で鉄の量を測ってみると、確かに供給量は年々減っている。だけど、流域全体で見ると、影響はまだはっきりとは検出されていない。大きな流域全体を測るのは難しく、過去のデータも必要です。流域の土地利用の変遷についても細かい情報を得られていません。まだまだやり残したことはあります。

岩下●ポイントでは変わるけどトータルでは変わらないとすると、人間の活動なんて影響しないという結論になるおそれはありませんか。

大西●変わっていないというのは正しい表現ではなくて、変わっている証拠が「検出できていない」のです。変わっている可能性は高いのですが、それを実証する高精度のデータは取れていない。一方で、個別の流域では、鉄が減っていることは科学的に確かめられていますから、人間活動の影響がないということはありません。白岩●地球温暖化の話と同じです。ポイントでは問題が起こっているのだから、将来的には全体でも起こるであろうというかなり蓋然性の高い推論に基づいて、それを抑制しようという動きを始めたところですよ。

岩下●ポイントというと、どの地域のどの程度のものですか。

白岩●大きいスケールで見ると、アムール川に注ぐ松花江の流域ですね。われわれがもっているデータは、そのなかのさらに限られた三江平原のポイントです。

岩下●三江平原は平野部で人口も多く開発しやすいから開発したのであって、そこから上流に行けば行くほど、開発しにくい場所ばかりですよ。アムール・プロジェクトは、むしろ松花江プロジェクトではないですか。

白岩●たしかにアムール川上流では十分にデータを採っていないのは事実です。一方で、上流の湿原面積はそれほど小さくなく、鉄のソースとしては、ポイントごとの濃度は低いですが、エリアが広い

のでインパクトはあると考えています。

大西●いまもっとも

鉄を供給している地域は、アムール川流のハバロフスクより下流に沿う広大な湿地です。まだあそこは残っていますからね。

岩下●それならロシアだけで調査や保全をやればいいじゃないですか。本当に重要なポイントはわりと限られていて、そこをもっと重点的にやったほうが、政策運用としてははるかに効くのでは？

白岩●将来のことを考えたらそうですね。しかし、過去のこともきちんとふまえないといけません。また、データのある地域に焦点を絞るのは確かに効果的ですが、その他の地域も鉄の供給に貢献している可能性があるのも、やはりアムール川流域全体で考える必要があります。

### 歴史的アプローチか、 現代のアプローチか

阿部●人文社会科学の視点からのアプローチは、どう考えていましたか。

白岩●最初の発想には、二つのアプローチがあった。ひとつは歴史の視点。人びとの生態系システムの利用の状況は歴史的にどのように変遷してきたか。もうひとつは、もっと現代的に、この生態系システムにもし問題が生じたらどう解決するのかというアプローチ。結果的には後者になった。1年目は歴史的な視点でも追究しました。しかし、あまり文献がなかったことや、歴史を遡るよりも現代の問題のほうがおもしろいという思いがあって、2年目くらいから現代の問題に移行しました。

阿部●具体的には？

白岩●岩下さんが当時あついていた中口国境問題ですね。中国とロシアとの関係がこれから変わるかもしれないという期待感がわれわれにはあった。そして2005年には、松花江の汚染事故が起こり

ました。現代の問題を意識する大きなきっかけで、「今まさにエライ問題が起こっているじゃないか」と痛感しました。

それとは別に、アムール流域の林業(森林生産と木材業)と農業がものすごく進展していて、陸面も大きく変わっていることもわかったので、そういう意味でも、現代のアプローチがおもしろいと感じましたね。

### アジェンダ・セッティングと コンソーシアムの設立

白岩●そこで、中国とロシアを巻き込んで「認識共同体」としてのアムール・オホーツクコンソーシアムをつくり、そこで現在や将来の問題を議論するという方向に進みました。コンソーシアムは鉄もターゲットにしますが、立ち上げの目的は、汚染も含めて自然科学に関わるあらゆる問題を議論することになりましたので、鉄をきっかけとして、全体の大きな話をしようよ……。

岩下●でも、最初からそんなにかっこいい話じゃなかったと思うんですが。(笑) ぼくは最初に話を聞いて、あとは関わっていないのでよくわかるのですが、最初からそんな社会科学的なストーリーができていたなんて、今日初めて知りましたよ。

阿部●岩下さんは、コンソーシアムの成り立ちをどう理解していますか。

岩下●私は1年半くらい前に会議に一度だけ呼ばれたのですが、社会科学系の話はそこから考え始めたはずで、花松さんが関わる前は、社会科学的な検討はほとんどなにもしていなかったというのが正しいのでは？

白岩●そうです。社会科学系のメンバーは当初、土地利用の背景を検討していました。岩下●そういう意味では、このストーリーづくりは最近の話ですよ。



おおにし・たけお

専門は水文学。岐阜大学流域圏科学研究所センター助教。二〇〇六年より研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」にプロジェクト上級研究員として携わった。二〇〇九年二月より現職。



しらいわ・たかゆき

専門は雪氷学。北海道大学低温科学研究所准教授。研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」(二〇一〇年三月終了)のプロジェクトリーダーを務めた。二〇一〇年四月より現職。



いわした・あきひろ

専門は国境学。北海道大学スラブ研究センター教授。クローバルCOE「国境研究の拠点形成代表。



はなまつ・やすのり

専門は国際法。二〇〇八年より研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」にプロジェクト研究員として携わった。二〇一〇年四月より地球研外来研究員。



あべ・けんいち

専門は環境人類学。相模地域研究。地球地域学領域プロジェクトラム主幹。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。

## コンソーシアムの未来可能性

白岩●コンソーシアムをつくったからには、なんらかのかたちで続けたい。2011年に第2回コンソーシアム会合を予定していますが、三か国代表の小さな実務家会議を半年に一回ほど開催しようと考えています。

岩下●積極的に進めるべきだと思いますよ。今は日中口のトライアングルの枠組みがまったくないし、二国間で協議しても煮詰まることが多い。地域で共有する問題をその地域で議論することには意味がある。

花松●この三か国はこれまで、それぞれに米国を向きすぎていました。オホーツクの鉄が影響しない米国抜きで、地域の問題を話し合う枠組みが必要です。

岩下●米国の関与なしに「中国とロシアとのあいだを取りもてる日本」というイメージが重要でしょう。そのためにも、「巨大魚付林」コンセプトをもっと世界に売る必要がある。

阿部●中国をどう取り込むかが鍵。イリ川やメコン川でも後ろ向きだし。

岩下●川下連合のような枠組みをつくって、中国にプレッシャーをかけるべきでしょうね。アムール・オホーツクコンソーシアムは日中口の三か国で、あくまでリージョンでやって、それを「環ユーラシア・コンソーシアム」のようなスケールにまで発展させようという意識が必要だと思います。

白岩●一方で、日本は三江平原の米や野菜を輸入したり、ロシア極東の木材を輸入しています。上流下流では片づけられないつながりがある。持続可能な水田開発に対する技術援助など、アムール・オホーツクコンソーシアムのなかで日本ができることはまだまだあります。その可能性はもう少し模索したい。それを進めつつ、提案いただいたような、中国を取り囲む連携も考えたいですね。

(編集●花松泰倫)

2010年5月18日 北海道大学スラブ研究センターにて

じゃないか」という考えで、なんとかかたちをつくらうと動きました。

花松●「委員会」という言葉を使うと、行政の側も関わった国家間交渉の場という意味合いが強くなるので、「コンソーシアム」としました。

大西●予防原則でコンソーシアムの原理を維持するのは賛成です。しかし、正直な感想を言えば、「このままではオホーツク海は維持できない」とはっきり言えるほどの、科学的に説得力のあるデータはまだ足りない。

岩下●予防原則と言っても、「うちはまだ発展途上国だからもっと使わせてください」という話もあるわけでしょう。この地域も同じで、足並みを揃えることは難しい。

花松●単純に予防原則に従って、前倒しの規制をしようという話ではありません。むしろそんな単純に話が進みそうにない国や地域だからこそ、またデータが不十分であるからこそ、コンソーシアムというソフトな議論の場が必要です。データ共有や情報交換をしながら、問題認識を一緒に高めようという趣旨です。

岩下●それに、オホーツク海の保全というように問題設定すると、利害関係がずれてしまう。ロシアは関係あるが、中国は関係ない。日本はといえば被害者です。中国は川の上流だから、こういう話に乗るインセンティブがない。川の管理問題と一緒に、話の調整はたいへんですよ。

花松●たしかに鉄だけで中国を巻き込むのは難しいし、中国はオホーツク海には関心をもっていない。でも、三江平原の開発においては、中国はなるべく湿地などの生態系に影響をださないようにしたいと考え始めているし、松花江やアムール川の汚染問題についても、中口関係をふまえて敏感になっている。コンソーシアムの守備範囲も汚染や生態系保全にまで広げて、中国になんとかテーブルにつけてもらおう努力をしています。

白岩●落とすどころをずっと模索していたんですが、最初は良いアイデアがなくて、どんどんゴールが近づいてきたので、みんなで「どうしよう、どうしよう」と言っていた。(笑) 3年目くらいに、北海道大学で開かれたシンポジウムで、ヘルシンキ委員会(バルト海洋環境保護委員会)の話聞いて、国を超えて環境問題を議論する機構が頭に浮かびました。

最初は「オホーツク委員会」と名乗っていたのですが、自然科学者どうしていくら話しても具体的な成果がまとまりませんでした。私たちとは別の視点で、この問題を考えてくれる人がほしかったので、花松さんを紹介してもらいました。

花松●私が地球研に来てすぐに会議を開いて、そこで初めてストーリーづくりの議論を本格的に始めました。

岩下●今でも忘れませんが、そこで私が「アジェンダをつくれればいい」と言ったら、参加者に「アジェンダってなんですか」と言われた。(笑)

阿部●プロジェクトは、最初から話が決まっていたわけじゃないところがむしろ大事です。(笑)

岩下●それが自然なんです。最初から結果がわかっているなら「なんでやっているの」と言われるでしょう。

白岩●3年目まではほんとうに苦しかった。オホーツク委員会のアイデアがぼんやりとでてきたときは、藁にもすがするような想いでした。でもなかなか具体化できずに困っていたところに花松さんが来てくれた。彼にはよく、ぼくらの話はナンセンスだと言われたけど。(笑)

阿部●バルト海は汚染がかなり顕在化した地域ですが、オホーツク海はまだ顕在化していない。将来そういう危険性があるということですが、スタート地点が違うでしょう。

白岩●ぼくらはそれは意識しています。予防原則をベースにして、「将来問題が生じるのだったら今から手を打ってもいいん

## 豊かさ・幸福・生の質——人間開発

## ■地球研コロキウムの趣旨

地球研では「地球研コロキウム」と題し、地球環境学の構築に必要なトピックスについて議論する場をもうけています。発表者が自分の考えを示し、これにほかの所員がコメントを加え、さらに所員みんなでディスカッションを行ないます。どのような議論がなされたのかをまとめて、順次ニュースレターに掲載します。

発表者 ● 梅津千恵子 (地球研准教授)

## ■発表の趣旨

テーマに掲げた「豊かさ・幸福・生(生活)の質」は相互に関係している。生活の質を形づくるものには、個人的な厚生や社会的な福祉が含まれる。「人間開発」という用語は開発途上国の発展に関連してよく使われる用語なので、ここでは途上国の文脈で考える。人間の安全保障では、生存・生業・尊厳の重要性が指摘されており、自由や社会的権利も重要な要素である。アフリカの干ばつ常襲地帯の農村では、生存を守ることは食料消費を維持することであり、生業を守ることは世帯収入と食料生産を維持することにほかならない。

生存と生業の維持を考える視点としてのレジリエンス(回復能力)の概念は、CS・ホリング<sup>\*1</sup>が1973年に生態学の概念として提唱した。その後、生態経済学のグループが社会生態レジリエンスとして展開した。一方、開発経済学は途上国の経済を扱いつつも、自

然資本については手薄で、先進国で発達した環境経済学や、エネルギー危機の時に注目された資源経済学は、途上国の開発問題に言及することはあまりなかった。このギャップを埋め、途上国における生態系を含めた農村社会の回復能力を考える視点が重要だ。

生活の質を表す指標としてのGNPやGDPは、集計された経済活動の尺度であり、国家の経済成長や福祉、国家間比較の経済指標として使われる。一方、人間開発指数HDI(Human Development Index)は、福祉の指標として国連開発計画が提案したもので、出生時の平均余命、1人あたりのGNP、成人識字率などのデータを使う。しかし、これらの指標は、ある年の生活の質は示すものの、自然資本の存在を無視している。

P・ダスグプタ<sup>\*2</sup>は「人口資本、人的資本、公共の知識、自然資本の増減の社会的価値を表す包括的な概念<sup>\*3</sup>」として、富の変化を表

す「ジェニユイン・インベストメント(Genuine Investment)」を提案した。

天然資源のマクロ的な分析では、R・レベト<sup>\*4</sup>による天然資源勘定の研究がある。通常のGDPはフロー概念で、環境資源のストックの増減を勘定に入れられないため、この研究では資源ストックの増減を補正したGDPを計算している。

世帯レベルではなく、ある範囲の地域の福祉を考えると、地域の天然資源と密接な関係にある地域の富を社会的福祉として測ることを考えなければならない。それには地域の生産基盤とさまざまなバックアップ機能、食料の生産と消費、知的財産、雇用機会、有用植物や森林資源へのアクセスなどが含まれ、地域資源勘定(NRP: Net Regional Product)のような新たな指標が求められる。

## ■コメンテーターから

## 新しい豊かさ・幸福・生の質を保障するレジリエンスモデルを

門司和彦(地球研教授)

経済が発展すればやがて貧者も豊かになって、よい生活ができるという「経済発展主義」に対して、梅津さんのレジリエンス・プロジェクトは、伝統的レジリエンスを基盤とする社会のあり方があるというテーゼを掲げていると理解する。

サハラ以南アフリカには、開発の恩恵もなく、伝統的レジリエンスも失い、さまざまなリスクに脆弱な貧しい人びとが多い。私もケニアでビルハルツ住血吸虫症対策の研究にかかわったが、実施された対策は十分に成果があがらず、健康問題における社会基盤の重要性を痛感した。

「豊かさ・幸福・生の質」を考えると、経済発展モデル、レジリエンスモデル、レジリエンス崩壊モデルによって、意味や中心価値が異なる。経済発展モデルでは現金こそが重要で、レジリエンスモデルではそれに加えて社会資本やコモンズへのアクセスが鍵となる。レジリエンス崩

壊モデルになると、また現金の世界となる。そうなるとエイズなどの感染症はさらに流行する。この現実をどう乗り越えればよいのか。

環境を無視した経済発展モデルの限界が明らかになった現在、レジリエンスモデルを展開させて、両者を合理的に一体化させた「未来モデル」の提案が求められている。この新しいレジリエンスモデルが、レジリエンス崩壊モデルを救済し、新しい「豊かさ・幸福・生の質」を保障することが望ましい。伝統的レジリエンスを現在の・未来的レジリエンスに転換させる動的レジリエンスの研究に期待したい。

## 「豊かさ・幸福・生の質」とQOL

奥宮清人(地球研准教授)

健康面から生の質(QOL:Quality of Life)を考えてみたい。WHOは健康を「身体的、精神的、社会的に良好な状態」と定義しているが、障害があっても、QOLを維持・向上するという考え方が重要であ

る。QOLでは、各個人が自分自身をどのように位置づけるかが重要であり、コミュニティの文化と価値観とのなかで、また、各個人の目的や期待、基準や不安感との関連において判断される。QOLは、人の身体的健康、心理状態、自立性、社会関係、信条や特殊な環境条件といった多くの要因の影響を受けるのである。

私たちの「高所プロジェクト」の調査結果では、主観的QOLと日常生活機能の平均値を、青海チベット人と日本人とで比較したところ、チベットの高齢者は、日常生活機能やいくつかの健康指標が低いにもかかわらず、主観的QOLは日本人よりも高いことがわかった。そして、老人のみでなく、コミュニティの智恵としての「老人智」の重要さも認識できた。

チベット高原の生活や社会には、人的ネットワークやチベット仏教など、QOLを支える仕組みが機能している。こうした仕組みの解明が、アフリカも含めて、世界の各地域における「豊かさ・幸福・生の質」の向上につながるだろう。

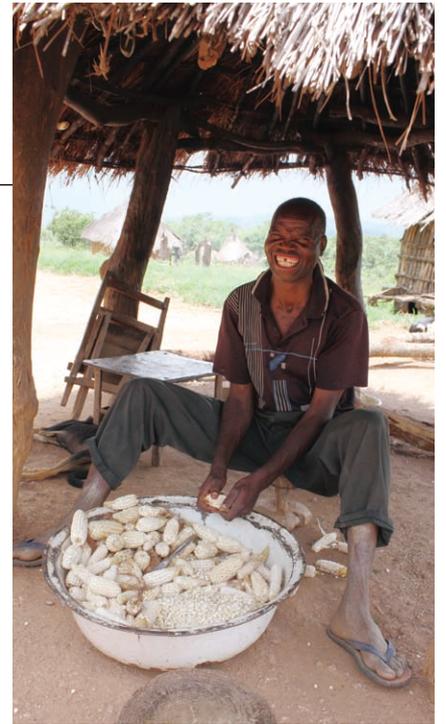
\*1 Crawford Stanley (Buzz) Holling カナダの生態学者。主な論文に「Resilience and Stability of Ecological Systems」(1993)

\*2 Partha Dasgupta イギリスの経済学者。主な著書に『Economic Theory and Exhaustible Resources』(Cambridge University Press, 1979)

\*3 『サステナビリティの経済学——人間の福祉と自然環境』パーサ・ダスグプタ著 植田和弘訳(2007年 岩波書店)

\*4 Robert Repetto アメリカの資源経済学者。

収穫したトウモロコシの種子をとる男性  
(ザンビア南部州)(撮影：石本雄大)



## ディスカッション

渡邊●きょうのテーマは「豊かさ・幸福・生の質」だった。「生の質」は、well-being(よく生きること)の意味や内容のことだと理解したが、豊かさや幸福とはなにかを手がかりに議論してほしい。

### 豊かさと自然条件を どんな指標でとらえるのか

鞍田●豊かさと自然環境との関係をどう考えるかが、まず大事なポイントだと思う。

梅津●私たちのプロジェクトでは、生態系などの自然環境を含めて地域開発のありかたを考え、自然資源に生活を依存する人たちを調査対象にしている。開発経済学が取り入れなかった社会生態システムのレジリエンス(回復能力)の視点から地域開発をとらえるということだ。

鞍田●生態系を含む自然と社会経済との両方を考えるときに、生物多様性と文化多様性との両方を視野にいれるなど、具体的にどのように分析するかが重要になる。

湯本●将来のストックを食いつぶすことを、環境経済学ではどう評価するのだろうか。

梅津●経済学の問題というよりも、未来の世代をどう考えるかという価値観の問題でもある。

湯本●持続できなくなる負荷の閾値を判断するには、自然科学的な分析が必要。干ばつ地での農業は、林業に比べて土壌の評価が難しいように、対象や分野によっても難易は異なる。

梅津●漁業では、資源量は比較的に見通しやすいが、土壌資源の変化の見通しは難しいだろう。

### 「求める」豊かさと幸福は どう評価されるべきか

村松●金持ちの豊かさや幸福はどう考えるのだろうか。農村の貧しさだけでなく、

都市の富裕層を評価するモデルも必要だろう。

門司●貧しい人とは異なって豊かな人にとっては、富と幸、そして健康は相関していない。とくにアフリカでは、貧困層に大きな影響をもつ富裕層を考えることは重要である。

渡邊●梅津さんは、調査地の人たちがどんな状態になればよいと想定しているのか。

梅津●なんらかの変動や予測できない事態に対して、「すべがないから、ただ耐える」というのではいけない。複数の対応策や救済策を保持しておくなど、バックアップ機能が備わっている社会や暮らしがよいと考える。

阿部●ブータンが提唱するGNH(国民総幸福度)をはじめ、幸福度の指標がすでにある。レジリエンスも、幸福や豊かさとはたしかに関係があるだろう。しかし、求める幸福や豊かさは、経済的な指標では表せないのではないかと。

梅津●豊かさとか幸福は主観的なものなので、指標にして比較することは難しいと思う。

阿部●豊かさや幸福を織込んだレジリエンスの考え方は成立するのか。計測できない部分をどう評価するのか、そういうことこそが問題。

門司●開発経済学は、レジリエンスを発展や経済の文脈で考えるのか、それとも既存の枠外に打ちだすのだろうか。梅津さんのプロジェクトでは、干ばつ対応などの短期的レジリエンスに加えて、長期的レジリエンスとの関係を示せばおもしろいだろう。

### 「よりよく生きる」ことを 考えるための三つの視点

湯本●個々の人の豊かさや幸福、生活の質と密接に関わる地域の富を測ることは可能なのだろうか。

梅津●国単位の自然資源勘定に対して、農村や地域などのより小さい単位での地

域資源勘定を考えてはどうだろう。

渡邊●よりよく生きることを考えるうえで、豊かさや幸福をどう評価するのかという根源的なテーマを設定されたのは立本所長だ。最後にまとめをお願いしたい。

立本●3点コメントする。まず注目すべきは、今回のタイトルの背景には、「価値は文化で決まる」という価値相対主義があること。環境問題は主観的に考えざるをえないことがあって、環境の評価には、豊かさや幸福などのとらえ方が大きく影響すると考えた。

次に、未来可能性とレジリエンスについて。持続可能性を考えるうえでの基準点をどこに設定するかということと、同時に単なるレジリエンスで良いのかということがある。言い換えれば、問題や事態を根源的にとらえなおす視線がほしい。

最後は指標について。指標を定めるときにはすでに価値観が入り込んでいるから、個別の数値比較はともかく、指標をあつかう際には、背景の価値観や思想を意識すべきである。こうした点を考慮して、「よく生きること」を考える必要がある。レジリエンス・プロジェクトには、この取り組みへの貢献を期待する。

(議事●石本雄大)

## ガバナンス・commons・社会的共通資本

第11回 地球研コロキウム

2010年4月13日(火)〈地球研講義室〉

司会：佐藤洋一郎

発表者●秋道智彌(地球研副所長・教授)

## ■発表の趣旨

地球上の多様な資源をだれが正当に利用するのか。社会や利害関係者間でいかに配分するのか。乱獲を防止し、適正に管理するにはどのような方策が重要なのか。枯渇のリスクを回避するにはどうすればよいのか。こうした問題群は、資源の循環や多様性とも関わる課題であり、時空間を通じた検証が必要分野でもある。

ここでは、K・マルクスとF・エンゲルスによる唯物史観、G・ハーディンのコモンズ論、E・オストロムの説、宇沢弘文の社会的共通資本論などをふまえて、資源利用における配分や協治(ガバナンス)のありかたについて考える。

「コモンの悲劇」を回避するため、世界中の国家や地域社会はさまざまな制度やしきたりを生みだしてきた。利害関係者間にお

る合意形成のメカニズムを明らかにするには、具体例の検証が重要である。とくに市場経済の介入にたいする地域社会の拒絶、妥協、協調などの意志決定がいかに形成されるかがポイントとなる。ここで四つの事例を挙げる。

①インドネシア東部のケイ諸島におけるタカセガイ採取

この事例は村落基盤型の資源管理といえる。資源をめぐる村落間の境界紛争は上位の地方政府機関の介入と裁判により調停された。村落内での資源の個人配分は0から100%まで変異があった。

②南タイ沿岸域の環境保全と水産振興

政府内部の水産局と森林局との縦割りの相克と、ジュゴンの保護政策とムスリム系漁民の網漁によるジュゴンの混獲とは、ともに相互に対立する図式にあった。こうしたなかで、「ヤドフォン」とよばれるNGOが自然保護と

生活の向上との両立にむけて漁民への説得活動を実践し、成果をあげている。

③ラオス南部のメコン河流域の魚類保護区

国際機関によるトップダウン式の共同管理の例であったが、住民の不満をうけて、一部の先進的な村落は自主的に保護区を一時的に開放する村落基盤型の管理手法に移行した。地域的な資源管理のあり方の好例といえる。

④ラオス南部の内陸部村落が共有する「ため池」

かつては共有されていた「ため池」が、近年になって私有化される傾向がみられる。近代化に附随するものとはいえ、売却による獲得資金は村落の発展と公共投資に供与され、社会的な公共性が担保された点は注目できる。

以上の事例から、共有から私有への変化を硬直的にとらえる必要がないこと、資源管理をめぐる村落の自律的な取り組みがもっとも重要であることが明らかになった。

## ■コメンテーターから

## 村落基盤型の「村落」とは？

中村 亮(地球研プロジェクト研究員)

2008年の生物多様性条約第8回締約国会議(CBD-COP8)が「沿岸・海洋の少なくとも10%を実効的に保全する」という国際目標を掲げたように、沿岸・海洋資源の適切な管理と保全は、地球環境問題において重要な課題である。しかし、資源をめぐる固有の社会秩序、住民の権利や気質の違い、さらに海資源の公共性・不可視性の高さなどから、利害関係者の合意にもとづく資源の管理・運営は困難である。

秋道教授は四つの事例で、政府、村落、NGO主導の資源管理にはそれぞれ一長一短があり、最終的には村落の自律的な取り組みが重要であることを示した。では、ここでいう「村落」とはなにであるのか。

私は東アフリカの海村社会を研究対象としてきた。その場合の「村落」は、民族や生業、宗教、性、世代などの差異による格差や階層をもつ不均質な社会であり、歴史的に外部者(移住者、旅行者、外国人労働者、研究者)を取り込んできた「開かれた社会」でもある。

村落の構造を解明する人文・社会科学的な研究がまず必要である。資源管理においては、民族基盤型、男性・女性基盤型、外国人基盤型などのように、「村落」を分解して考えてみる必要もあるだろう。

## 資源管理の指針、ヒント、落とし穴

坂本龍太(地球研プロジェクト研究員)

社会的共通資本という考え方が謳う「豊かな社会」、「美しい、豊かな自然環境」は、価値観や立場に左右される。発表されたインドネシア、タイ、ラオスでの水産資源管理の事例は、地域により自然条件や住民の置かれた状況が異なり、資源所有に関わる権利の束(Bundle of rights)はさまざまであった。資源管理のあり方は、歴史、文化や生態の違う地域ごとに異なるであろう。

南タイ沿岸域における水産局と森林局、ジュゴンの保護政策と網漁文化との図式において、すべての者にとっての「豊かさ」や「美しさ」を満たしうる社会的共通資本が存在するのか。存在するとして、現実とのギャップを埋める過程での資源管理上、だれの価値観や立場を優先するのか。その調整はどうするのか。このような課題を示していたのではないのか。

さまざまな資源管理の事例を見聞した演者にだからこそあえて、多様性や例外の存在をふまえたうえでの資源管理の指針、ヒントや落とし穴について意見を求めた。

## ディスカッション

佐藤●お二人のコメントは、いろんなガバナンスに通底するものはなにかという疑問を提示した。それを明らかにする答えを求める前に、それを明らかにする方法論はなにかを聞きたい。

時間の概念を加えて  
ガバナンスをとらえる

秋道●文化相対主義という考え方があるが、それではなにも出てこない。最大多数の最大幸福という普遍主義もありえない。通底するものの一つは、時間。ある時点で決めたことがどれだけ持続するか。焼畑だったら20年、人間の一生は60年。パラメーターはさまざまだが、歴史時間性には収斂性がある。そこに注目することができるのではないのか。「共有から私有へ」という呪縛から抜け切れていない研究者が多いなか、宇沢さんは社会的共通資本についてよく考えている。

坂本さんの問いに答えるなら、たとえば、選挙して51対49という結果をどう考えるか。地域のコンフリクトがたまたまそ

南タイのアンダマン海沿岸における蓄養生け  
養で魚に餌をあたえる男性。ジュゴン保護の  
ため、網漁の代替漁業として推奨されている



うあらわれたということで、結果は逆の  
こともありうる。そのつどプロセスを見て  
いかないとまずい。その社会でなにかい  
ちばんリスクがあるかを考えれば、レジリア  
ンスの閾値を越えることがない限り、われ  
われ研究者が介入する必要はない。社会そ  
のものに崩壊にいたらない方策がある。

中村さんに対して答えると、国立公園  
をつくる際に海洋保護区(MPA)という  
ことがいわれるが、上からやろうと下か  
らやろうと、コンフリクトはおこる。地  
域と政府とをつなぐ役割を担うことが重  
要。村人全員の要望に公平に応じること  
はそもそも非現実的だ。

## スケールの違う視点をとりこむ

阿部●きょうはすべて村落共同体に関す  
る事例、つまりローカル・コモンズがと  
りあげられたが、地球環境問題を考え  
るうえでは、より広いコモンズ(グレイ  
ターないしグローバル・コモンズ)が問題では  
ないか。「より広いコモンズ」は質的に同  
じだろうか。

秋道●きょうの事例は必ずしもローカ  
ル・コモンズの話ではない。それぞれに  
国際問題としての側面もある。

谷口●ローカルとグローバルとの間をみ  
る視点があるのではないか。水の国際法  
では、国境をまたぐ河川や地下水の問題  
は、乾燥地の水の資源的視点から議  
論される。「どのくらいで使い切るか」み  
たいな。だが、モンスーンの湿潤な水を  
ふまればおのずと理解されることだ  
が、資源的な側面だけでなく、むしろ循  
環的な視点も必要だろう。そうした地域  
的でリージョナルな視点がある。

山村●もともとコモンズの問題はローカ  
ルなものから、グローバルな問題に移っ  
てきた。しかし、じっさいはその二つの  
接点の問題になるし、それを橋渡しする  
理論が必要。自然系と社会系とのネット  
ワークの結合においても、コモンズのス  
ケールが問題だ。

秋道●モノという視  
点もある。商品の動  
きで追うという社  
会経済史的な考え  
方だ。それとはちが  
う視点・方法論が求  
められている。

湯本●この問題につ  
いての地球研的な突

破口は、やはり文理融合だ。地下水や生物な  
どはそれぞれ回復時間が異なる。資源とよ  
ばれる「モノ」のターンオーバー(代謝回転:  
生物などが合成・分解をくり返して保つ動的平衡)  
の実態を自然科学的な視点で把握したう  
えで、それでどうなのかという議論が必要。もう一つは、たとえば山を生物学的な  
視点だけで見るのではなく、地権をふま  
えた視点からも見る——使う側・使われる  
側の二重のまなざしで見ることが必要で  
はないか。そこが地球研の強さを発揮で  
きるところだろう。

内山●景観もローカル、リージョンと、い  
ろいろなレベルで語られる。そういう意  
味では、景観も当然に共有される。景観  
とは、その地域の人たちのアイデンティ  
ティとして、ある一つの世界観・世界認  
識を共有しているものではないか。

秋道●景観は、自然のモザイクに人間の  
権利がべったりとついたものだと言え  
る。そういうことはオストロムも宇沢さ  
んも言っていない。

鞍田●市場経済はどう評価するか。

秋道●全否定はしない。だが利益優先では  
いけないという話だ。

## 健康のガバナンス

阿部●坂本さんに質問したい。健康は自分  
で管理しているつもりになっているが、  
一方で社会的問題でもある。健康は、社  
会的共通資本といえるのか。

坂本●そういう考え方もある。たとえばタ  
バコの経済損失。本人の害だけでなく、  
その人が死んだことで失われた労働資本

を算定することがある。

門司●近代が健康に注目したとき、健康  
は公共のものになった。こういう時代  
には、社会的共通資本を越える新たな価値  
を考えなければならない。たとえば、コ  
モンズについて言えば、モノからではな  
く、ヒトの立場からの見方とか。

佐藤●それは条件的ではないか。予防接種  
のような、個人に投資されている場合  
にはよいが、そうでない時代には社会的共  
通資本は重要だ。

門司●グローバル化と地域の人  
とのせめぎあいが問題。個別性と普遍性  
との対峙のさせかたが大事です。

## 自然の視点、豊かさの問題

縄田●ガバナンス、コモンズという言葉で  
議論をすれば、人間中心主義となるの  
ではないか。だがアジアの場合は、「鎮守の  
森」みたいな自然の側から考える議論も  
あってもよいのでは。

秋道●それについてはよく理解している。

湯本●宇沢さんの『社会的共通資本』(200  
年、岩波新書)は、「豊かな社会とは？」から  
始まる。社会的共通資本を考えるうえ  
では、豊かさをどう考えるかが問題では  
ないか。医療制度の問題もそこにはいる。

秋道●いろんな意味で「共有できれば」と  
いうのが最大の望みだ。結論として、地  
球研のさまざまなプロジェクトをコモ  
ンズやガバナンスの視点で見直してみ  
ることを提案したい。地球環境学としての  
コモンズ論を確立することができるの  
ではないか。(議事●鞍田崇)

# プロジェクト研究のまとめ方、終わり方を思う

今村彰生(京都学園大学バイオ環境学部准教授)

私は、湯本貴和さんがインキュベーション研究を立ち上げる2003年4月に、サポート役として地球研に籍を得ました。旧春日小学校の2階、「4研」とよばれていた研究室に2人で間借りのように机を並べたのがスタートです。

あれから7年。共同研究者100名を超える大所帯で成果を上げてきた湯本プロジェクトも最終年度を迎え、最終成果を世に問おうとしています。あらためて、立ち上げの苦労が思い出されます。キーワードはやはり、地球環境問題の解決に資する「地球環境学の構築」でした。

当時の本研究は、研究所全体で五つほどでした。科研費研究などは異質の地球研らしい成果がど

うだせるか、それにはなにが必要か。先行する中静透さんや沖大幹さんのプロジェクトや異分野の方がたと議論し模索する日々でした。お弁当の時間など、立場も越えていると会話するのが楽しく、そうして思考の堂々巡りを回避していました。

## 挫折からの再スタート

湯本プロジェクトは初年度の終わりに大きな挫折を経験しました。予備研究を飛び級して本研究へと促されて評価委員会に挑戦したのですが、その評価が芳しくなく、飛び級できなかつたのです。

そのころにはメンバーとして安部浩さん(現・京都大学大学院人間環境学研究所准教授)と内山純蔵さん(現・地球研准教授・プロジェクトリーダー)が順次着任され、濃密な議論を交わしながら研究計画をつくり、期待をもって臨んだだけに強いショックを受けました。外部評価を乗り越えなければ、地球環境問題の解決に資するなど夢のまた夢なのだ、と感じました。

マイナス評価の要点は、「具体的な成果とその達成への道筋が不明瞭」というものでした。これを受けて、当初のテーマ「共生概念の再構築:極

東島弧における歴史的アプローチ」から、現在のテーマ「日本列島における人間-自然相互作用の歴史的文化的再検討」にたどり着くまで、1年近くかかりました。迷走です。

## 迷走のすえの方向転換

苦悶のなかから現在のテーマを設定し、プロジェクトの新たな運営方式を見いだすことができた鍵は、自らのバックグラウンドとその作法(discipline)へのこだわりを捨てたことでした。当初は生態学自体に、そして生態学者としてのわれわれ自身に「環境学に資する」という思い入れが強すぎたのです。生態学者として他分野の人を惹きつけるプレゼンテーションに腐心するよりも、多様な分野の人たちの問題意識に触れ、そこから共同研究の計画を立てるという転換は、野心的でしかかも有効でした。かように果敢なリーダーを支えることができたことを、私は誇りに思っています。

私が地球研を離れて4年以上経ちましたが、湯本プロジェクトは優秀なポスドク(博士研究員)のみなさんに支えられ、順調に歩みをつづけています。前途有望な若き研究者に異分野交流の場を提供することで、地球研は社会や今後の環境学に大きく貢献しています。もちろん、それだけでは成果として不足でしょうが、今後も多くの若手を育ててほしいものです。

## 社会にどのようなメッセージを送ることができるか

すべてのプロジェクトが直面するのは、社会や環境問題に対する成果とはなにか、をわかりやすくまとめ、提示することでしょう。「私たちは地球環境問題にどのように取り組めばよいですか」と率直に問われますが、なかなか回答できません。

湯本プロジェクトも個々の研究成果は堅牢ですが、プロジェクト全体で社会にメッセージがだせるでしょうか。「聴衆」に納得して帰っていただけるでしょうか? 研究期間が残り半年であっても、明確なメッセージを描くことは可能でしょう。真摯に取り組みたいところです。

いまむら・あきお

専門は森林生態学、菌根生態学。現在の研究テーマは、ブナ科シイ属の林の生産量と動態、伝統的水田畔の植生とその保全、ナマスから見る人-水田-河川の相互作用環、など。2006年4月に講師として京都学園大学バイオ環境学部バイオ環境デザイン学科に着任、現准教授。



京都府亀岡市犬飼川のほとりに立つ筆者



所員紹介——私の考える地球環境問題と未来

## 一座建立の 世界へようこそ

木村栄美

(地球研プロジェクト研究員)

唐代の高僧趙州の逸話に「喫茶去」があります。「喫茶去」という語の解釈はさまざまですが、「お茶を飲んで一息つきなさい」といったところでしょう。寺院において茶は覚醒作用を重視して飲まれていました。人を覚醒させることにより新たな思考をひらめかせる要素ももっていたのです。

### 喫茶去と環境問題

私の研究は、茶の文化が展開し、やがて日本独自のスタイルである「茶の湯」が成立するまでの過程が対象です。背景となった中国の茶文化と比較し、その影響性と相違を考察し、解明することが目的です。

茶の湯といえはまず思い浮かべるのは茶道でしょう。茶道はいまでこそお稽古事といった位置づけで、環境問題に取り組む地球研とはまったく関わりがないようにみえます。しかし喫茶の世界は、とくに動乱期の南北朝、あるいは戦国時代に文化として大きく開花し、茶道具一つが政治や経済を大きく動かすこともありました。

長い歴史のなかで育まれた茶の湯の環境には、じつはいまの地球環境や将来の環境への取り組みを考えるうえでヒントになるものがたくさん盛り込まれています。



佐藤プロジェクト主催「International symposium on wild rice 2009」に参加した際、バンコク・チャオプラヤー川にて(右端が筆者)。一緒に写っているのは武藤千秋さん(地球研)と佐藤雅志先生(東北大学)



上・西行庵 西行が結んだといわれている京都・東山にある庵。近世初頭の茶人たちはこのような隠者の庵から茶室をイメージしたのである  
右・周臣「品茶図」 明代では、人里離れた山中などで琴棋書画と茶を嗜む隠者の姿が多く描かれている(ミシガン大学付属美術館蔵。Artist: Zhou Chen, Title: 'Brewing Tea under Pines by a Stream')



### 自然を求める「市中の山居」

茶の湯空間を表現する「市中の山居」ということばがあります。16世紀、日本に宣教にきていたポルトガル人ジョアン・ロドリゲスが『日本教会史』のなかに記したことばです。

客を招いて茶でもてなす者を数寄者と称し、茶道具ばかりでなく、茶を喫する空間とそれを取り巻く環境にもこだわりをもっていました。「市中の山居」とは、喧騒な市中にあえて人里離れた山奥のような自然を取り込み、そこに庵を結び隠遁することです。現実のなかであえて非現実の世界に入り込み、隠者のように自然と戯れることに意義がありました。

数寄者が理想とした茶の湯の原点は、中国における文人サロンです。彼らは自然と一体となった風光明媚な場を選び、文人の教養とされた琴棋書画とともに茶を嗜んでいました。とくに茶聖と称された陸羽や、茶界の至聖と称された盧全は、日本の数寄者にとってはまさに理想的な隠者の姿だったのです。

市中の山居は、自然を求めながらも造形的であり、ありのままの自然ではありません。しかし、たとえ造形的であったとしてもあえて非日常的な自然空間を選択する、という点を数寄者たちは尊重していたと推測します。それは決して新し

いものではありません。長い時間スケールのなかで、本来はもっとも身近に関わるべきものでありながら、その一方で破壊と再生を繰り返す自然空間にヒントを見出した空間です。

この非日常的な空間は、徹底して無駄が省かれています。そこに僧俗や身分上下に関係なく人びとが集い、同じものを食べ、同じ茶を飲む。そして雑談を繰り広げ、一つの座を形成しました。これがまさに一座建立の世界です。

### 喫茶環境から地球環境の問題へ

茶を喫する環境は、現代の私たちが忘れていたものを提案するのではないのでしょうか。研究の成果として、私は茶の湯成立時における喫茶文化の空間と設えを再現したいと考えています。同時に、喫茶文化における精神性を現代の、あるいは将来の地球環境問題の考察に生かすことができるのではと探求しています。

幸い地球研は、自然環境に恵まれた場所にあり、異分野の研究者が集まる場です。隠者という体験を通して環境問題を議論することは可能ではないでしょうか。

#### ■リーダーからひとこと

佐藤洋一郎(地球研教授)

科学博物館でのプロジェクト展示\*準備での木村さんの活躍が最近目立ちます。研究成果を文字だけでなくコーディネートして形にしてみせることも大事な表現法のひとつ。9月18日から約4か月、皆さんぜひ科博(上野)にお出かけあれ! 木村さんが言いたかったことがきっと読み取れるはずですよ。

#### きむら えみ

■略歴

2007年3月 京都造形芸術大学大学院博士課程芸術専攻修了(学術博士)  
2007年12月～2008年3月 総合地球環境学研究所プロジェクト研究推進支援員  
2008年4月～現職

■専門分野 日本文化史、喫茶文化史

■地球研での所属プロジェクト

「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」

■研究テーマ 茶の湯成立までの古代、中世における日本の喫茶文化について、その背景となった中国の茶文化と相互比較しながら解明する。他に喫茶にかかわる酒、菓子等食文化についても現在研究中

■趣味(好きなこと) 琴(少しだけ弾けます)。茶道。誓を集めること。その他日本の古典的なこと。声楽(最近あまり練習していませんが……)

\*企画展「あしたのごほんのために——田んぼから見える遺伝的多様性」

2010年9月18日(土)～2011年1月16日(日) 国立科学博物館(東京・上野公園)

イベントの報告

第2回 日文研・地球研合同シンポジウム

**京都の文化と環境——森や林**  
2010年5月22日(土)13:30~16:30  
(国際日本文化研究センター 講堂)

日文研と地球研の第2回合同シンポジウムは「森や林」をテーマとして396名の聴衆が見守るなか開催されました。

山田勇氏(京都大学名誉教授・地球研共同研究員)は講演「地球の森世界からみるモリの日本」で、世界各地の森林とそこに暮らす人びとのようすを解説したのち、京都の現状と今後の課題を総括しました。末木文美士氏(日文研教授)は講演「近代日本の自然観を反省する」で、本多静六、南方熊楠、宮沢賢治らの思想をふまえ、近代に新しい自然

観がどのように形成されたかを紹介しました。

パネルディスカッションは、地球研の若手2名による意見発表から始まりました。村山上由美子・プロジェクト研究員は「考古学からみた古代の木材利用」と題して遺跡出土木製品の分析結果から、京都周辺の森林利用の変遷を解説しました。そして藤原潤子・プロジェクト上級研究員から「極寒シベリアの森と暮らし」が紹介され、調査のようすを交えつつ凍土溶解・洪水などの問題が提起されました。

小松和彦氏(日文研副所長・教授)はフランス映画『ユキとニナ』の紹介を皮切りに、異人・妖怪研究の第一人者ならではの魅力的な語り口で聴衆を異界との接点=森に導きました。

5本の発表をうけて、秋道智彌副所長・教授の司会のもと「森と農」、「次世代に伝える森」など、重要なキーワードが提示され、密度の濃い議論が繰り広げられました。

閉会にあたり立本成文所長から「日文研と地球研ではリアリティの見方がちがう」との総括と、「来年もシンポジウムをやります」との宣言がなされました。

今回は地球研と日文研のもちあじの違いが鮮明となりました。日文研は、吟味した資料を使って観念的なレベルまでじっくり掘り下げる熟考型。地球研は、時空間を往来しつつ足で稼いだ情報を駆使し、問題提起を繰り返すフィールド型。両者のタッグによる第3回の合同シンポジウムが待たれます。(村山上由美子)

第39回 地球研市民セミナー

**ねんてんさんに訊く“俳句と環境問題”**  
2010年6月18日(金)18:30~20:00  
(ハートピア京都 3階大会議室)



日本の伝統文化「俳句」。季節には日本人の自然観が凝縮されています。俳句と環境問題は意外な組み合わせのようですが、環境問題に文化的な問題があることを考えるとどこか接点があるかもしれません。話し手に京の俳人・坪内稔典氏(佛教学文学部教授)を招き、地球環境問題を俳句の世界から考えようと試みました。

“ねんてんさん”の愛称で親しまれる坪内氏。講演冒頭の話は、他愛もない日常生活からみたエコロジー。朝、目覚めの枕もとにアリが集まることに疑問を抱いたねんてんさんは、自身とアリの関係を考え始めます。視野はさらに広がり、ある日、ナメクジへと発展。ナメクジとエコロジーを組み合わせると“ナメコロジー”。ナメクジからみた環境問題を“ナメコロジー”と名付けて活動する研究者との出会いを披露しました。

ユーモラスな話を淡々と語るねんてんさんは、場内約100人の聴衆を微笑ませ、沸かせます。冗談のような話の一方で、最近のブーム的な環境問題への取り組み方や“机上の空論的”学究界の姿勢を鋭く指摘。「ナメクジなどの忌み嫌われている生き物や、不可避な自然現象を受け入れることなくして、地球環境問題を語れるだろうか」と根本的な疑問を投げかけました。

カバの愛好家としても知られるねんてんさんは、夏にカバが赤い汗を分泌することから「赤いカバ」は今や夏の季節。時代や文化の移り変わりは季節に反映される。季節や環境の変化に敏感であることは大事だと話し、「子どもそのものが自然である」、常識や偏見に凝り固まらない自由で無邪気な感性や行動が環境問題と身近に接する秘訣ではないかと示唆しました。(編集室)

第9回 地球研フォーラム

**私たちの暮らしのなかの生物多様性**  
2010年7月10日(土)13:30~17:00  
(国立京都国際会館 Room D)

2010年は国際生物多様性年にあたり、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が10月に名古屋市で開催されます。こうした背景を反映して、本フォーラムも300名を超える聴講者を迎え、盛況裡に終わりました。期せずして市井の関心の高さをうかがわせる一幕となりましたが、まさに生物多様性とわれわれの生活との緊密な関係を明らかにすること

が目的でした。

課題設定の前提に、生物多様性が急激に損なわれつつある現実への透徹した認識があります。それは一見「多様」にみえなくもない各報告を貫く線分をなしています。

生物多様性条約の成立背景・経緯が国際政治的なコンテキストから見通しよく論じられ(香坂報告)、生活必需品と化した携帯電話とアフリカのゴリラの生息環境の破壊とが相即不離の関係にあることが示され(岡安報告)、われわれの生活の基盤である食糧・食生活の多様性が失われつつあることが明みにされ(佐藤報告)、日本における生物資源利用の消長が歴史的なパースペクティブから跡づけられ(湯本報告)、市場メカニズムの有効利用によって生物多様性の維持と経済成長が同時に達成される可能性が示唆されました(大沼報告)。かくして生物多様性が学問領域横断的な主題であるのみならず、すぐれて「政治」的な問題でもあることが明らかにされました。すなわちわれわれの実践がその帰趨を大いに左右するがゆえに、むしろ、さらに越境的に論じられるべき問題なのです。

パネルディスカッションで生物多様性保持をめぐる実践が論点となったのも必然でした。マクロな問題解決につながるミクロな実践の潜在力が、「異質なものを受容する感受性」、「正しい消費」といったキーワードで提起されました。それらのキーワードがいかなる関係にあるのか、またその射程の深度の究明が今後の課題です。(安部 彰)

## 研究活動の動向

### 研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2010年5月19日～7月14日開催分

開催日	タイトル	主催者(プロジェクトリーダー)	開催場所
5月19日	第20回 中国環境問題研究会「中国西南部と大陸部東南アジアを結ぶ人・モノのネットワーク」	中国環境問題研究拠点ほか	地球研セミナー室
5月20日	JSPS招へい研究員によるセミナー「エネルギー技術は気候変動への解決策となるか？」	梅津千恵子	地球研セミナー室
5月20日	第1回 都市の未来可能性研究会 「現代アメリカにおけるサステイナブルな都市圏形成～持続可能な都市圏ガバナンスの構想に向けて」	村松 伸	東京大学本郷キャンパス
5月21日	NEOMAP第1回 景観セミナー「水辺景観の変容——中国・太湖地域」 「フィクションにおける未来社会の変容——マンガ作品の「未来イメージ」を時代別に考察する」	内山純蔵	大谷婦人会館
5月21日	第30回 人と自然：環境思想セミナー「自作について」	佐藤洋一郎	地球研講演室
5月21日	第25回 山村プロセミナー 「モンゴル高原における牧畜生産と草地保全——内モンゴルの総合開発戦略評価とモンゴルの畜産品需給モデルの計画」	山村則男	地球研5研会議室
5月25日	第10回 資源プログラム研究会「アラブ海をめぐる水問題」	資源領域プログラム	地球研セミナー室
6月1日	第1回 文明環境史領域プログラム講演会「Agricultural Revolutions and their Impact in the Mediterranean World」	文明環境史領域プログラム	地球研セミナー室
6月7日	第43回 地球研セミナー「社会的プロセスと生態的プロセスを一つのモデルにする際の問題点：景観を事例として」	地球研	地球研講演室
6月13-15日	EHEゼミナール 第1回 セミナー	立本成文	湘南国際村センター
6月16日	第31回 人と自然：環境思想セミナー「味わいの零度」	佐藤洋一郎	地球研講演室
6月17日	第44回 地球研セミナー・第31回 レジリエンス研究会 「ザンビアの食糧安全保障、気候変動、土地利用：小規模農村世帯の脆弱性とレジリエンスのための空間分析とモデル」	地球研	地球研講演室
6月25日	第26回 山村プロセミナー「サラワクの森林開発と在地社会：商業伐採とプランテーションを比較して」	山村則男	地球研プロジェクト研究室
6月27日	第5回 ジャカルタ都市研究会 「インドネシア首都圏の不動産開発：スハルト体制期との連続性と変化」	村松 伸	京都大学東南アジア研究所 稲盛財団記念館
6月29日	第45回 地球研セミナー・第2回 EPM(Environmental Policy Making)勉強会 「地球環境問題にアカデミズムはどう貢献するのか——志としてのアジェンダ設定」	地球研	地球研講演室
7月2日	NEOMAP 第2回 景観セミナー「ヨーロッパ景観考古学における最近の研究動向」「玉文化からみた東アジア内海の景観」「16～17世紀はじめの東アジアにおける陶磁器貿易と伝統、およびその日本への影響」	内山純蔵	地球研セミナー室
7月2日	地球研プロジェクト「環境変化とインダス文明」セミナー 「Evolutionary Approaches to Culture and Human-Nature Relationships」「Medical Ecology」	長田俊樹	地球研セミナー室
7月6日	EHEゼミナール 第2回京都セミナー「総合地球環境学と未来可能性」	立本成文	地球研講演室
7月7日	人と米をめぐる研究会シンポジウム「人、米を醸(かも)す」	佐藤洋一郎	地球研講演室・ダイニング
7月7日	第32回 エコヘルス研究会「Chinese influence in Laos: Reflections from agriculture and forestry research」	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
7月8日	第46回 地球研セミナー・第8回 中国環境問題ワークショップ「中国の環境ガバナンス」	中国環境問題研究拠点	地球研講演室
7月14日	福井希一 FS「人間と地球と緑のあり方」シンポジウム「人間と地球と緑のあり方」「弥栄地区調査報告」「HuG指数検討中間報告」「よい「緑」と悪い「緑」があるのか？——生態系サービスからみた緑化」	福井希一	地球研講演室

### 国連子供環境ポスター審査会 (グローバル部門)

報告 2010年5月26日(水)〈地球研 講演室〉

国連環境計画 (UNEP) や地球環境平和財団 (FGPE) 等が主催するこのコンテストは、世界の子どもの地球環境に対するメッセージを絵画にして伝えようと1991年に始まりました。2010年度のテーマは「生物多様性」。地球研は協力機関として、これまでに約100か国から寄せられた20万点以上の応募作品を収蔵し、研究資料として活用しています。グローバル部門の入賞作品は、10月に「2010年国連子ども環境会議」(名古屋市) で発表予定です。地球研は、一部の作品を活用し、人間文化研究機構「連携展示事業」の一環としてカルタ製作等を計画しています。(編集室)



### 招へい外国人研究者の紹介

WEBER, Steven A.  
ウェバー・スティーブン



- 所属プロジェクト 環境変化とインダス文明
- 招へい期間 2010年5月24日～2010年8月24日
- 現職 ワシントン州立大学バンクーバー校 人類学部准教授
- 専門分野 植物考古学・民族植物学・南アジア先史・インダス文明

包 茂紅 (BAO MaoHong)  
バオ・マオホン



- 所属プロジェクト 中国環境問題研究拠点
- 招へい期間 2010年6月18日～2010年9月17日
- 現職 北京大学歴史学系副教授
- 専門分野 環境史・アジア太平洋地域研究

POKHARIA, Anil Kumal  
ポカリア・アニール・クマール



- 所属プロジェクト 環境変化とインダス文明
- 招へい期間 2010年7月1日～2010年9月30日
- 現職 ヴィルバルサハニ古植物研究所 上級プロジェクト研究員
- 専門分野 植物考古学

RIBA, Tomo  
リバ・トモ



- 所属プロジェクト 人の生老病死と高所環境——「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応
- 招へい期間 2010年8月1日～2010年10月31日
- 現職 ラジブ・ガンディー大学環境科学学部地理学科 准教授
- 専門分野 社会地理学

JORDAN, Peter  
ジョーダン・ピーター



- 所属プロジェクト 東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史
- 招へい期間 2010年6月16日～2010年9月16日
- 現職 アバディーン大学考古学部准教授
- 専門分野 考古学・民族考古学

MADELLA, Marco  
マデッラ・マルコ



- 所属プロジェクト 農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境
- 招へい期間 2010年6月8日～2010年10月7日
- 現職 スペイン国立研究所考古学・人類学部研究教授
- 専門分野 植物考古学・考古地理学・南アジア考古学

## イベント情報

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

### 第1回 地球研キッズセミナー

**募集** 2010年8月23日(月)13:30~16:00  
(地球研講演室ほか) 参加無料  
対象:地球研近隣の小学生と保護者  
定員:約100名 ※保護者同伴に限る

地球研近隣の小学校に通う児童とその保護者を対象としたセミナー「地球研キッズセミナー」を開催します。詳しくは地球研ホームページ、もしくは下記までお問い合わせください。

#### 【第一部】キッズセミナー

「絶滅した生き物とわたしたち」

講師: 縄田浩志(地球研准教授)

「恐竜はいきている! カエルは人間の先祖さま?」

講師: 富田京一(肉食爬虫類研究所代表、学習院女子大学・国際文化交流学部特別講師)

#### 【第二部】施設見学とプロジェクト訪問

「体験しよう! 地球研—きみも未来の研究者」

実験室で体験(冷凍保管室、顕微鏡室)

研究プロジェクト訪問(研究内容の質疑など)

#### ●問い合わせ先

地球研 総務課企画室

Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106

E-mail: [shimin-seminar@chikyu.ac.jp](mailto:shimin-seminar@chikyu.ac.jp)

### 「RIHN→COPI0」 ポータルサイトができました

**告知** <http://www.chikyu.ac.jp/cop10/>

2010年10月に名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議(COPI0)が開催されます。今年には国際生物多様性年にもあたり、地球研でもさまざまな活動を展開してまいります。それらの活動を紹介するポータルサイト「RIHN→COPI0」が公開されました。

#### ●問い合わせ先

地球研 生物多様性情報室

E-mail: [diversity\\_rihn@chikyu.ac.jp](mailto:diversity_rihn@chikyu.ac.jp)

#### 人事異動

2010年7月1日付け

【採用】

嘉田良平(研究部教授)

← 横浜国立大学環境情報研究院 教授より

### 第40回 地球研市民セミナー

**募集** 石油資源がなくなったとき、どうやって生活していきますか?—その2

2010年9月17日(金)15:00~16:30

(地球研講演室)入場無料

講師: 鷹木恵子(桜美林大学人文学系教授)

石山 俊(地球研プロジェクト研究員)

私たちの生活は、石油、石炭、天然ガスといった再生不可能な化石燃料に大きく依存しながら成り立っています。化石燃料時代はいつか終焉を迎えますが、エネルギーの大量消費を伴わない、「持続的生活」が根付くためには、「新しい人間文化像」を考える必要があります。今回のセミナーでは、日本の農村とアフリカの生活をヒントにポスト石油時代の生活像を模索します。

#### ●申し込み・問い合わせ先

地球研 総務課企画室

Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106

E-mail: [shimin-seminar@chikyu.ac.jp](mailto:shimin-seminar@chikyu.ac.jp)

### 地球研・愛媛大学・西条市共催 市民シンポジウム

**告知** 未来につなぐ地下水の科学  
—水の都、西条からの発信

2010年9月23日(木)13:00~17:00

(西条市総合文化会館) 定員1,000名

愛媛県西条市は、市民11万人共通の地下水資源を将来にわたって確保するため、道前平野地下水資源調査研究委員会を立ち上げ、2007年より多面的な研究を実施してきました。地球研は2009年8月に西条市と交流協定を締結し、同市の水研究に取り組んでいます。このシンポジウムは、これまでの研究活動により明らかになった西条市の地下水の自然科学的成果をわかりやすく発信し、さらに同市がめざす「水環境都市」に向けて、さまざまな視点から意見交換をします。

#### ●申し込み・問い合わせ先

西条市役所 生活環境部 環境衛生課 環境計画係

Tel: 0897-52-1221 Fax: 0897-52-1294

E-mail: [kankyoeisei@saijyo-city.jp](mailto:kankyoeisei@saijyo-city.jp)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」  
隔月刊  
Humanity & Nature Newsletter No.27  
ISSN 1880-8956

発行日 2010年8月1日  
発行所 総合地球環境学研究所  
〒603-8047  
京都市北区上賀茂本山457番地の4  
電話 075-707-2100(代表)  
E-mail [newsletter@chikyu.ac.jp](mailto:newsletter@chikyu.ac.jp)  
URL <http://www.chikyu.ac.jp>

編集 定期刊行物編集室  
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社  
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。

編集後記

### 温暖化にまけない地球研の議論

地球温暖化に関する報道には、短絡的・牽強附会的なものも見受けられます。例年にないことが起こるとなっても温暖化のせい。しかし、7月後半のこの暑さ。思わず「地球温暖化の影響か……」とつぶやいてしまいました。今号の特集は「国際動向調査」と「終了プロジェクト報告」です。暑気払いに、地球研のCoolで熱い議論をお届けします。(阿部)

編集委員 ● 阿部健一(編集長) / 湯本貴和 / 梅津千恵子 / 神松幸弘 / 源 利文 / 鞍田 崇 / 林 憲吾